

れに關する消息は極めて明かである。それに依ると碑は一八二三年以來、即ち疑もなくトンガン族の叛亂の時に倒壊されて、今日ではその上部が全く失はれてある。ペリオ氏はこの缺けた部分を發見しやうとして、碑の位置附近を捜査したけれども無効に了つたことである (Une bibliothèque médiévale retrouvée au Kan-sou, B. E. F. E. O. 1908, p. 502)。氏がこの千佛洞の有名な書窟から齎した漢文書の目録を見ると、その 2551 に道書の斷簡を擧げ、裏面には朱字でこの碑文が寫してあると記され、且つ此の碑は今日毀損されて居るが、曾て徐松によつて研究せられたものだとし、徐松が「缺」として讀み得なかつた文字をも、ペリオ氏はこれに依つて讀み得て補ふた所多いとの旨も見わけて居る。さてこの碑文の中には、西域水道記に載せてある所によると、次の文句が認められる。

莫高窟者、厥初秦建元二年、有沙門樂傳、戒行清虛、執心恬靜、嘗杖錫林野、行至此山、忽見金光、狀有_二千佛_一、缺五造窟一龕、次有法良禪師、從東屆此、又於尊師窟側、更即營建、伽藍之起、濫觴於_二一僧_一、莫高窟といふのは、何時から生じた名であるかは明らかではないが、この碑文の書かれた當時から、既に敦煌の千佛洞の總稱であつたことは甚だ明かなことで、かく「莫高窟者」と書き起して、その續きに「計窟室一千餘龕」と見えて居り、決してシャヴンヌ氏や、スタイン氏の考へる如く (Chavannes, Dix inscriptions, p. 96; Stein, Serindia. p. 800) 永く洞中の最も高さものゝ一つを呼んだ名ではない。尤も之については尙別に證據もあるが、一々こゝに記すにも及ぶまい。それでこの千佛洞の創始は前秦苻堅の建元二年即ち西紀三百六十六年で、沙門樂傳といふものゝ造營に始まると認められるのであるが、樂傳については別に斷碑の發見せられた事があつて、その千佛洞